



『 肝がんの治療について 』

近年、慢性肝炎（B型肝炎やC型肝炎）に対する治療は、著しく進歩してきました。しかし、肝がんの危険性が完全に「ゼロ」になったわけではありません。肝がんが発見された場合、なるべく早く治療を受ける必要性があります。

肝がんの治療は、患者さん自身の「肝機能」と「がんの進行度」によって決まります。

まず肝機能ですが、A・B・Cの3段階に分類され、Aが最も良く、Cが悪い段階です。A又はBであれば治療を行い、Cであれば緩和治療を行うという一般的な規則があります。

さらに、がんの進行度は1～4期に分類されます。1・2期では手術療法やラジオ波焼灼療法（熱で焼き切る治療）が行われます。3期ではカテーテルを使用した肝動脈化学塞栓術（兵糧攻めの治療）が中心に行われ、4期では全身化学療法（点滴や内服治療）、放射線治療が主に選択されます。

しかし当院では、肝機能がC段階であっても、十分に注意し治療を成功している患者さんも多くおられます。さらに、肝がんの状態が、「3cm以下かつ3個以下」もしくは「5cm以下で1個」の条件を満たせば、生体肝移植の保険適応となり、治療の幅が大きく広がってきました。

現在、肝がんの治療は非常に多岐にわたります。患者さん一人ひとりにあった治療法を的確に行うことが最も重要です。



鹿児島厚生連病院
内科統括部長
平峯 靖也